様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月２３日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：２３８１０００１
研究課題名（和文）　旧ソ連空間における非承認国家問題

研究課題名（英文）　The Issue of Unrecognized States in the Territory of the Post-Soviet Sphare

研究代表者
佐藤　圭史（SATO KEIJI）
北海道大学・スラブ研究センター・GCOE 共同研究員
研究者番号：20609599

研究成果の概要（和文）：
本研究は、南オセチアとアブハジアの「非承認国家問題」と、その他の、非承認国家問題に至らなかった類似のケースを比較検証するという、先行研究では見られない新たな分析角度を学界に提起することに成功した。2 年間のプロジェクトで、国際学会発表が 5 件、国内学会発表が 1 件、海外招待講演が 2 件、査読付き雑誌への論文発表が 1 件、その他論文発表が 2 件と、十分な研究成果を出した。

研究成果の概要（英文）：
The project succeeds to get a new angle on ethnic studies of the former Soviet states, comparing the cases of South Ossetia and Abkhazia which formed “unrecognized states” to the cases which failed to. During two years the project achieved 5 cases of presentation in international conferences, 1 case in a domestic conference, 2 cases of invited lecture, 1 article of an English review journal and 2 articles.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１２年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：　地域研究
キーワード：国際関係論、地域研究、政治学、社会学、歴史学

１．研究開始当初の背景

本プロジェクト企画前に、若干の理論研究と、3 つのケーススタディを実施していた。先行研究で提示した理論研究の実証性を高めるためにも、より多くのケーススタディの実施が不可欠であった。研究助成を得ることでケーススタディを実施し、理論研究の実証性を高める、これが本プロジェクトを企画した背景である。

２．研究の目的

（１）民族問題生成要因を明確にする

本プロジェクトの目的は、ソ連邦で生成した「民族問題」の中でも、ソ連邦崩壊後にモルドヴァやコーカサス地域での「非承認国家」問題や、バルト諸国の「少数民族」問題へとつながる事例を研究対象とし、1988 年・1989 年当時は類似の展開をみせたそれぞれのケースが、なぜソ連崩壊後に紛争の激化、あるいは、鎮静化など、異なる方向へと発展していったのか、その要因を社会学の基礎理論である資源動員論を用いて解明することにあった。実証研究に用いたケーススタディは、2008 年 8 月の武力紛争の端緒となった「南オセチア自治問題」と、1992 年から 1993 年にかけて武力紛争へと発展することになった「南オセチア自治問題」であった。本研究は、ソ連邦から独立した、旧ソ連諸国を現在でも悩ませている「非承認国家問題」の生成要因を探ることとも関係している。

（２）フィールドワークを実施する

プロジェクト完遂の為に、フィールドワークの実施が不可欠であったことは前述した。訪問国は、リトアニア、エストニア、モルドヴァ、グルジアに及んだ。このフィールドワークによって、日本国内や、海外から資料請求では得ることができない、貴重な一次資料を収集することが可能となった。

３．研究の方法

（１）時間軸による分析

研究手法は時間軸と空間軸による分析を試みた。時間軸分析では、非基幹民族の社会団体同士、非基幹民族の社会団体と共和国政府（あるいは共和国基幹民族の運動を導く社会団体）、非基幹民族の社会団体とソ連中央（ソ連邦人民代議員大会、ソ連邦最高会議、ソ連大統領など）といった 3 つの異なるレヴェルの関係を中心として、相互作用の中で生じる社会運動の質（主義主張や規模など）の変化を検証した。ここでは、3 軸によるアクターの相互関係を論じたロジャース・ブルベイカーによる国際関係論を援用している（Brubaker, 1996）。ここで注意したいのは、非基幹民族の意見を代弁する社会団体は一つとは限らず、またそれぞれの団体が持つ主義主張は異なっており、一枚岩的な存在ではないということである。ソ連体制の動揺の中で繰り返される社会団体の離合と集散は、運動の盛衰に大きな影響を与えた。また、共和国基幹民族の社会団体からの圧力、あるいは共和国政府からの政治的圧力も、非基幹民族の社会運動の盛衰に大きな影響を与えていた。このような運動の隆盛を念頭に置きつつ、時間軸をもとにしたアクター間の関係の変化の把握を試みた。

（２）空間軸による分析

空間軸分析に当たっては、資源動員論の古典であるシドニー・タローとチャールズ・ティリーの理論を援用した（Tarrow, 1990; 1998, Tilly, 1978）。これらの理論によって社会団体が大衆動員を図る大まかなロジックが理解できた。ただ、これらの理論における「資源」の定義は、民族問題を研究する上で必ずしも十分でないため、著者独自に「資源」の定義を行う必要があった。拙稿（Sato, 2009）でも論じたように、現段階で「資源」と想定している要素は、運動を導いた社会団体の人的資源（構成員）、政治的リーダー、財政基盤、人を引き付けるプロパガンダ（政治的なアピール）、メディアの活用、ストライキなどのイベントの活用、外部からの精神的支援（他国の「同胞」からの支援）、内部からの精神的支援（領域内の他民族からの支持・不支持）である。これらの要素の高低をリストアップし、沿ドニエストルを含めた他のケースと比較しつつ、その差異を明確にした。

（３）フィールドワーク実施方法

資料の絶対的不足分を補うためにフィールドワークを実施した。フィールドワーク前には、スラブ研究センターなど国内にある研究機関で、ソ連邦末期のグルジアの政治的動向をソ連中央、共和国レヴェルの新聞で入念に調べた。アブハジア、南オセチアの地方新聞は、トビリシやモスクワの国立図書館・国立文書間で調べた。地方新聞は多くの情報を提供しており、その後の研究を円滑に進めるためにもここでの読み込みが重要となった。経済的な資源の分析に関しては統計資料を用いた。合わせて、資料面での調査を十分に進め疑問点を抽出したうえで、自治運動を推進した中心人物へのインタヴューを試みた。

４．研究成果

個別の研究成果に関しては、論文の形で既に発表しているので、それらを参照していただきたい。ここでは、プロジェクトそのものがもたらした研究成果に言及したい。

（１）新たな視点の発見

本プロジェクト企画時に選択したケーススタディは、グルジアの「南オセチア自治州」と「アブハジア自治共和国」であった。

両地域とも武力紛争を経験し、「非承認国家」の建国に至った地域である。グルジア共和国でのフィールドワークの過程で、ソヴィエト・グルジアには「アジャリア自治共和国」が存在したことに気が付いた。「アジャリア自治共和国」は、ソ連時代にグルジア内で自治共和国の地位があったこと、豊かな港湾施設を持っていたこと、アジャリア人に見られるイスラム的文化要素があること、などから、政治的集合行為を実行に移す可能性を秘めていた。それにもかかわらず、アジャリアでは自治権の拡大を求める政治運動が起こらなかった。この興味深い現象を研究過程で発見することができた。

（２）海外研究機関と関係構築

平成 24 年 1 月から 2 月初めにかけて、グルジア共和国の首都トビリシでフィールドワークを実施した。フィールドワーク中に、南オセチア紛争、アブハジア紛争を専門に研究しているシンクタンク、研究所、大学機関を訪問した。トビリシ国立大学では、与党議員でサーカシヴィリ大統領顧問のダヴィド＝ダチアシヴィリ氏、紛争問題研究のギア＝ノディア教授、シンクタンクでは、グルジア国際戦略基金（Georgian Foundation for Strategic and InternationalStudies）のアルキル＝ゲゲシゼ氏とそれぞれ面会した。南オセチア紛争、アブハジア紛争の背景を熟知した研究者たちからの情報提供は、論文の引用面での確証性を増すことになった。また、平成 24 年 3 月 2 日には、ハーヴァード大学でコーカサス問題シンポジウムが開催され、その会場で多くのグルジア問題の研究者と交流を深めた。今後のグルジアでの研究を円滑に進める上で重要な、研究者間のネットワークを構築することができたと確信している。

（３）研究発表の充実

研究成果発表は、平成 23 年度に研究滞在したハーヴァード大学（ケンブリッジ・米国）で行った。平成 24 年 2 月 3 日に私自身が組織した研究会では、2 名のグルジア問題の専門家を招待した。私も発表者として加わり、「南オセチア紛争、アブハジア紛争の武力紛争化の要因分析」と題して発表した。

2012 年 9 月のコルカタ（インド連邦）で開催された、第 4 回東アジア・スラヴ＝ユーラシア学会では、「Europeanization at the ‘grassroots’ level in Moldova: What are effective ways to deal with the Transnistrian conflict?」と題して、モルドヴァの沿ドニエストル紛争の解決策を論じた。沿ドニエストル問題は、アブハジア問題、南オセチア問題と並んで非承認国家問題に分類され、紛争の生成過程において多くの共通点を持つ。研究発表ではこの点に注目しつつ行った。国際学会の研究発表では、当然のことながら、英語でディスカッションペーパーを作成し、口頭発表を行った。コルカタでの国際学会でのディスカッションペーパーは出版計画中である。2012 年 10 月の名古屋で開催された国内学会、2012 年度日本国際政治学会研究大会では、「民族的資源動員の中範囲理論：ソ連邦末期のモルドヴァ、グルジア、エストニア、リトアニアでの事例を中心に」と題して発表をした。ここでの発表は、少数民族が自治権を獲得、あるいは、拡大を要求して政治的集合行為を行ったケースを比較したものであった。この研究発表では、スタートアップでの研究期間中に、グルジアのフィールドワークで収集した資料を十分に活用することができた。国際政治学会で発表した内容と関連した論文は、査読付きの英文雑誌『Europe and Asia Studies』に掲載される。

以上のような研究成果が高く評価されたことにより、米国の 2 大学で招待講演を行った。各講座が 90 分に渡る授業形式であった。多くの聴講者の前で、日本人若手研究者の研究水準を十分に示すことができたと確信している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Keiji Sato, “Ethnic Political Mobilization: An Integrative or Disintegrative Force in the Modern Polity?: Casestudies of Political Mobilization by Non-titular Nations in Moldova, Estonia and Lithuania,” *Two Decades of Development in Post-Soviet States: Successes and Failures*, 査読無, 2013. （印刷中）

② Keiji Sato, “Acknowledgment of the Secret Protocol of the German-Soviet Nonaggression Pact and the Declaration of State Sovereignty by the Union Republic of the USSR,” *Europe and Asia Studies*, 査読有,2013. （印刷中）

③ Keiji Sato, “Die Molotow-Ribbentrop-Kommission und Forderungen nach Sezession undUnabhangigkeit post-sowjetischer Territorien,” *Der Hitler-Stalin-Pakt 1939 in den*

*Erinnerungskulturen derEuropae*r, 査読無, 2011, pp. 141-153.

〔学会発表〕（計 8 件）

① Keiji Sato, “Romanians’ beyond EU border: Is Romania Heartland or Economic Asylum for Moldovans and Romanian Diaspora in Ukraine?” Border Regions in Transition (BRIT), マリンメッセ福岡（福岡市）、2012 年 11 月 13 日。

② 佐藤圭史「民族的資源動員の中範囲理論：ソ連邦末期のモルドヴァ、グルジア、エストニア、リトアニアでの事例を
中心に」2012 年度日本国際政治学会研究大会、名古屋国際会議場（名古屋市）、2012 年 10 月 20 日。

③ Keiji Sato, “Europeanization at the ‘grassroots’ level in Moldova: What are effective ways to deal with the Transnistrian conflict?” Fourth East Asian Conference on Slavic and Eurasian Studies, MAKIAS (Kolkata: India), 2012. 09. 05.

④ Keiji Sato, “Social and Political Movements in South Ossetia, southern Southern Moldova (Gagauzia) and Transnistria at the End of the Soviet Era,” 第 7 回国際シンポジウム『帝国から地域大国へ、国家と非国家の間で』、北海道大学（札幌市）、2012 年 7 月 4 日。

⑤ Keiji Sato, “Ethnic Political Mobilization: An Integrative or Disintegrative Force in the ModernPolity?” West Coast Seminar（招待講演）, University of California (Berkley: U.S.A.), 2012. 03. 16.

⑥ Keiji Sato, "Political Mobilization by Russian Speakers in North East Estonia at the End of the SovietEra," West Coast Seminar（招待講演）, University of California(SantaBarbara: U.S.A.), 2012. 02. 15.

⑦ Keiji Sato, "Outbreak of Local Armed Confrontations between Titular Nations and Non-titularNations in Georgia and Moldova," 2nd Hokkaido Roundtable, Harvard University (U.S.A.), 2012. 02. 03.

⑧ Keiji Sato, “Ethnic Political Mobilization: An Integrative or Disintegrative Force in the Modern Polity?” 1st Hokkaido Roundtable, Harvard University (U.S.A.), 2011. 12. 03.

〔図書〕（計 0 件）
無し

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等

無し

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　圭史（SATO KEIJI）
北海道大学・スラブ研究センター・GCOE 共同研究員
研究者番号：20609599